九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

辞書と翻訳

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5483

出版情報：言語文化論究. 16, pp.65-80, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

辞書と翻訳*)

福　元　圭　太

1．『解体新書』

吉村昭の小説『冬の鷹』と菊地寛の小説『蘭学事始』はともに同じ素材を扱っている。菊池の題名がそのまま示しているように，医学をはじめとする蘭学草創期のエピソード，すなわち『ターヘル・アナトミア』の翻訳に関する苦心譚である。我が国の「蘭学の事始」はしかしさらに年月を遡ることができる。長崎の通訳者たち，いわゆる「通詞」たちの存在がそれである。

長崎の「通詞」たちはオランダ語を学問として体系的に習得することよりも，もっぱら口まねで会得することに終始した。しかしなかでも西善三郎や吉雄幸左衛門は異色の存在で，あの甘藷（さつまいも）を日本に普及させたことでも有名な昆陽青木文蔵（以下青木昆陽とする）を通して幕府の許可を得，オランダ語の体系的学習に挑んだ。西善三郎にいたっては蘭日辞書の編纂まで企てている。西の事業はしかし，その死のため頓挫する。享年52歳。

『解体新書』翻訳者のひとりである前野良沢は，まずこの西善三郎に会うため長崎へ赴いた。わざわざ訪ねてきた良沢に西は即座に，オランダ語習得など無理だからやめろ，と言ったという。それにもめげず，良沢は47歳にして青木昆陽の門を叩き，オランダ語の勉強を始める。吉村昭は中編『冬の鷹』の主人公に，この時期の前野良沢を据えている。当時オランダ語というものが一般の日本人にどのように見られていたか，吉村は巧みに良沢の同僚に語らせている。豊前（大分）中津藩，良沢の朋輩の台詞である。

> 「なにが書いてあるのか，いっこうにわかりませぬ。紅毛人とわれらはすべてが異なっております故，このような書物が理解できぬのも当然のことなのでしょう。縦に書くべき文字を横に書く。呆れたものです」[1)]

『解体新書』（1774年刊行）はいわゆる『ターヘル・アナトミア』の逐語的漢文訳である。その原著はドイツ人 Johan Adam Kulmus の手になり，原題を Anatomische Tabellen といった。オランダはライデンの外科医，ヘアルデュス・ディクテン（Gerardus Dicten）がこのドイツの書物を蘭訳。Onteleedkundige Tafelen として1734に発刊した。これが俗称『ターヘル・アナトミア』である。

前野良沢は長崎通詞，吉雄幸左衛門から『ターヘル・アナトミア』を見せられ，大枚をはたいてこの書を購入する。杉田玄白もまた別ルートでほぼ同時にこの本を入手している。

両名ならびに他の数名が，骨ヶ原刑場での「腑分け」にこの書物を持って立ち合い，人体解剖図のあまりの正確さに驚嘆，翻訳を志した経過はつとに有名である。1771年，明和８年３月４日のことであった。

吉村は前野良沢を，極めて学究肌の人物として描いている。一方で『解体新書』翻訳にあたってのもう一人の立て役者である杉田玄白を，あざといほどに実務化肌の人物として描いているのと対照的である。良沢は藩の費用で長崎留学の許可を得たおり，学問の神様，太宰府天満宮（一説には宇佐八幡宮）に立ち寄り，誓いを立てたという。

「苟くも真理を推し活法を抽かずして猥りに聞達の餌と為す所あらば神明之をたおせ」[2)]

事実，良沢は巷間での名望を求めず，玄白に依頼された『解体新書』の序文執筆を拒否したうえ，訳者名からも自分をはずすように玄白に念を押した。一方のちのち『解体新書』翻訳の苦労譚である『蘭学事始』を著した玄白は，「誠に艫舵なき船の大海に乗り出せしが如く，芒洋として寄るべきかたなく，たゞあきれにあきれて居たるまでなり」[3)]としながらも，自分たちの功績を感動的に語る術を心得ていた。『蘭学事始』のなかには事実と合わない，いわば嘘の記述がある。昔の中学の教科書にも一種の美談として採用された話であったらしい。それは「鼻」という単語の訳出にまつわるエピソードである。「鼻のところにて，フルヘッヘンドせしものなり」[4)]。良沢，玄白らが使った仏蘭辞書の記述には「庭を掃除すれば落葉や土などが集まってフルヘッヘンドする」という記述があり，これを糸口に「うず高くなる，隆起する」から「鼻」を導き出したということになっている。菊地寛はこのエピソードを採用し，菊池らしく大衆の心を掴んだが，『ターヘル・アナトミア』の鼻のところにはフルヘッヘンド（verheffende）という単語は存在しないらしい[5)]。『蘭学事始』は玄白が齢83歳（1815年，文化12年）になってから，『解体新書』を翻訳していた41年前を振り返っての回顧談ゆえに，記憶が定かでない，という説明もつこうが，『蘭学事始』の記述を鵜のみにするのはやめたほうがよさそうだ。

『解体新書』から語り起こしたのも，外国語の翻訳とはどのように行われてきたのかを考えるためである。翻訳をするにあたってわれわれは辞書に手をのばす。しかし当然のことながら，辞書がない時代もあったのであり，また現代においても２か国語辞書の見出し語側になっていない言語がたくさんある。そのような場合はまったく翻訳が不可能であるか，前後の脈絡がある程度わかる場合には「文脈が命」という事態が生じる。

『解体新書』の場合は「文脈」とは言わないまでも，少なくとも手がかりはあった。翻訳のために必要な辞書がわずかながら存在したのだ。それは先にふれた青木昆陽による『和蘭文字略考』３巻とピートル・マリンの著になる『仏蘭辞書』である。

昆陽の『和蘭文字略考』第１巻はABC26文字の文字と発音を解説。「l ハ舌ヲアゲテ呼ブナリ，r ハ舌ヲ巻テ呼ブナリ」といった，現在も日本人にとって最も難しい発音上の注意などが述べられている。第２，３巻ではオランダ語の単語721個が紹介され，日本語訳と発音が記されている[6)]。ただし語の並べ方はABC順ではない。もちろんわずか721の単語で医学書が翻訳できるわけはない。辞書というものの存在を良沢は知らなかった，と吉村は書いている。

［…］良沢は楢林栄佐衛門からオオルデンブーク（辞書）という書物が存在することをはじめて耳にした。

「オオルデンブークとは，ラテン語でデキショナールと申す。エウロパでは，さまざまな国によってそれぞれ言葉がちがいます。それでは，他の国の書物も読めず話すこともできませぬ。そのような不便をとりのぞくために，デキショナールと申す書物があるのです。例えば，フランス語の言葉をオランダ語ではなんと言うかということを克明に書きしるしたものです。つまりデキショナールとは，言葉と言葉を橋渡しする役目をもっているのでござる」

良沢は眼をかがやかせた。

「それは便利なものでございますな。そのようなものが日本にもあれば，どれほど異国語をきわめる上で助かるかわかりませぬ」[7)]

この会話は辞書の存在を自明のものとしているわれわれからすれば，虚を突かれるような感じがする。

良沢は主にピートル・マリンの著になる『仏蘭辞書』を使っている。これはフランス語の見出し語をオランダ語の訳語に移し，その訳語のオランダ語自体をさらにオランダ語で細かく説明したものであった。玄白の『蘭学事始』の「鼻」のエピソードで「仏蘭辞書」が登場したのもそういう事情である。

それではいったい外国語と日本語の間の２か国語辞書は，いつごろどのようなものが編纂されたのであろうか。翻訳と辞書の関係を考察するために，以下で２か国語辞書編纂の歴史を簡単に振り返ってみたい[8)]。

２．辞書の歴史

まずは『**日葡辞書**』を挙げるべきであろう。これはいわゆるキリシタン辞書で，室町時代に来日してキリスト教を布教したイエズス会宣教師たちが編集した。1603年，時あたかも江戸時代の開始と同時に長崎で刊行された（長崎学林刊）。収録語数は32,000。日本語をポルトガル式ローマ字で書き，日本語の動詞・形容詞の活用を示している。また方言，文学用語なども区別して記述されている。これを原本とする岩波書店刊の『邦訳日葡辞書』は中世の日本語，とくにその発音をも知るためには必見の書となっている[9)]。

漢和辞典の歴史はもちろんこれよりずっと遡ることができる。12世紀平安末にはすでに『類聚名義抄』などがあった。漢和辞典に関してはここではこれ以上ふれない。

18世紀半ばを過ぎると蘭学の発達にしたがってオランダ語を日本語にするための辞書が必要とされ始める。因幡の藩医，稲村三伯による『**波留麻和解**』（1796年，寛政８年）は13巻からなる本格的な蘭和辞典であったが，わずか30部しか成らず，蘭学を志すも，この大冊を写すに挫折する者が多かった。『波留麻和解』の簡約版として京都の藤林泰助が編纂した『**訳鍵**』（1810年，文化７年）は654頁27,500語を収録した。その部数は100部。さらに時代はかなり下って，あの勝海舟が江戸末期に『**和蘭字彙**』の編纂に取り組む。海舟は大砲

の操練を見にいったものの，砲身に書いてある字が読めず，発奮してオランダ語習得を志したという。そのとき海舟は18歳。当時すでにオランダ商館長ズーフと長崎通詞たちによる『蘭日辞書』[10]（1816年，文化３年に成立，1833年，天保４年脱稿）が約10万語の収録を誇っていたが，価格は60両。昭和50年代の始めの計算だと，３LDKマンションが買えるくらいだという[11]。海舟にはとても手が出ない。海舟はそこで１年につき10両で『蘭日辞書』を蘭方医から借り受け，１年のあいだに10万語辞典を２通り写すという離れ業をやってのける。その一部は自分用とし，残りの一部は売り払って，『蘭日辞書』のレンタル代，紙代，家計の足しにしたというから，ただ者ではない。その間，満足に寝たこともないほどだったらしい。数年後の1858年（安政５年）幕府の侍医，桂川国興がこれを刊行した。５冊組3,760頁。これが飛ぶように売れた。

海舟が学んだのはオランダ語だけではなかった。この傑物が長崎海軍伝習所の学生監督として軍艦操縦法をまなび，1860年（万延元年）に咸臨丸の艦長として渡米したのは周知のことであろう。その際ウィルコックの『蘭英辞書』（1811年，ロンドン刊）を手引きに英語の勉強にも打ち込んでいる。

蘭学から英学へ重点が移行していく中でもうひとりの人物の名を挙げなくてはなるまい。豊前中津藩出身，前野良沢の遠い後輩にあたる福沢諭吉である。福沢は緒方洪庵率いる大坂は「適塾」でオランダ語を学んだ。また江戸の中津藩藩邸の向かいには桂川国興の邸宅があり，福沢は足繁く国興を訪ねてオランダ語を磨いた。しかし横浜の開港のおり（1859年，安政６年）港見物に出かけるが，そこここに書いてある字が読めない。もちろんそれはオランダ語ではなく英語だったからだ。福沢はこれからは英学が最重要となることを悟り，海舟とともに咸臨丸で渡米する。サンフランシスコでは同行した通訳の中浜万次郎（ジョン・万次郎）とウェブスターの辞書を買いこみ，猛勉強したという。また福沢は中国人・子卿による『華英通語』（中国語で書かれた英語小辞典＋会話集）も買い求め，それをもとに『**増訂　華英通語**』（1860年，万延元年）を編纂。わずか200頁ばかりの小冊子であったが，実用的な英会話集である点が福沢の実学志向を如実に表して興味深い。「ｖ」を「ヴ」と表記する諭吉の創案はこれに始まる。

英語の辞書は枚挙にいとまがない。ただその代表として挙げるとすれば，ヘボンの『**和英語林集成**』（1867年，慶応３年，上海刊）にとどめをさす。ローマ字の表記法にその名を残すヘボン（James Curtis Hepburn 1815-1911）は，現代の日本語では「ヘップバーン」と表記すべきであろう。あのベルギー生まれの，妖精のような女優，オードリー・ヘップバーン（Audrey Hepburn）と同じ綴りなのであるから。当時の日本人には「ヘボン」聞こえたのであろう。それはさておき，ヘボンの辞書の成立過程を追ってみる。1858（安政５年），井伊直弼によって「日米修行通商条約」14条が調印される。その第８条に，アメリカ人が日本で礼拝堂を開いてよい，また踏絵も廃止するという条文があった。ニューヨーク42番街の病院長であったヘボンは，これを機に日本でキリスト教宣教医として働くことを決意する。これは若いころにヘボンが夢に見ていたことであった。日本行きを志願してからわずか100日後には病院をたたみ，アメリカを出航するというスピードだった。ヘボンは1859年（安政６年）秋，神奈川で無料診療所を開設，同時に日本語学習も始める。ヘボンには以前，15年間にわたり中国のアモイで医療伝道をした経験があり，すでに漢字の知

識はあったので，日本語の習得も早かったのだろう。『古事記』や『平家物語』も読破するという進捗ぶりであった。来日７年目の1866年（慶応２年）には20,700語からなる和英辞書の原稿を仕上げる。翌1867年（慶応３年）に『和英語林集成』が刊行され，これが爆発的に売れる。東大の前身，大学南校などは学生用に2,000部をまとめて購入したらしい。

１語に限るが『和英語林集成』の見出し語の変遷を追ってみたい。「虚説」という見出し語である。

慶応３年初版（1867年，20,700語）KIYO-SETSZ
明治５年再版（1872年，23,000語）KIYO-SETSU
明治19年三版（1886年，35,000語）KIYOSETSU

この明治19年，三版での書き方がいわゆる「ヘボン式ローマ字」として定着することとなった。ヘボンはこの年『和英語林集成』の版権を丸善に譲り，巨富を得るが，そのあらかたを明治学院に寄付する。翌明治20年，新約に続き旧約聖書も和訳するという偉業を達成。明治25年には33年間にわたる日本での伝道生活を終え，アメリカへ戻っている。

ヘボンの業績を考えるにあたり，いささか月並みだが「宗教者の情熱」という言葉を思い起こさずにはおれない。超越的な存在がヘボンに労働への内的動機を与え続けたと考えるのが，このような偉業達成の説明としては最もわかりやすいであろう。

もうひとつ英語の辞書を取り上げる。今度は英和辞典である。『コンサイス英和』はひと昔前までは英和辞典の代名詞であった。日本各地に残っている伝説がある。その昔，中学校の英語の秀才は，インディアンペーパーの辞書のページを，単語を覚えるはしから食べて英語を上達させた，というのだ。しかしこの辞書は戦時中，敵性言語ということでしばしば官憲に没収されたらしい。没収されるぐらいならと，乏しい刻みたばこの巻き紙の代わりに辞書の頁が使われた話もよく聞く。

インディアンペーパーを用いた最初の『袖珍コンサイス英和辞典』（神田乃武・金沢久編；1922年，大正11年），同『和英』（石川林四郎編；1923年９月１日，大正12年）は三省堂から出版された。ただ初版のものは言わずもがな，大正期の実物は現在ではほとんど残っていないらしい。わざわざ記した『和英』の刊行日を確認されたい。なんと関東大震災の当日ではないか。もとよりほとんど出回ることができなかったのだ。初期の『コンサイス』は大震災，また戦火による消失の他，先に述べたように「食べたり吸ったり」という人災を被った，数奇な運命をたどった辞書である。

嬉しいニュースがある。三省堂のPR誌「ぶっくれっと」（2000年July, No. 149）によれば，これら２つの『袖珍コンサイス』の復刻版が出たという。特に和英は当時の日本語をよく伝えており，「防務会議」などの軍事用語や「にこぽん主義」（桂太郎公爵の応接ぶりからきたことばで，にこにこしながら相手の肩をポンとたたく，すなわち誰彼かまわず安価に愛嬌をふりまく主義）といった見出し語が見い出されるという。

オランダ語以外の西洋語の習得が日本で始まるのは，19世紀初頭，文化年間（1804-18年）で，まずフランス語，１年遅れてロシア語と英語，ドイツ語はこれより50年遅れることになる。1860年（万延元年），プロシアからの使節が来日するわずか２日前に，江戸の蕃

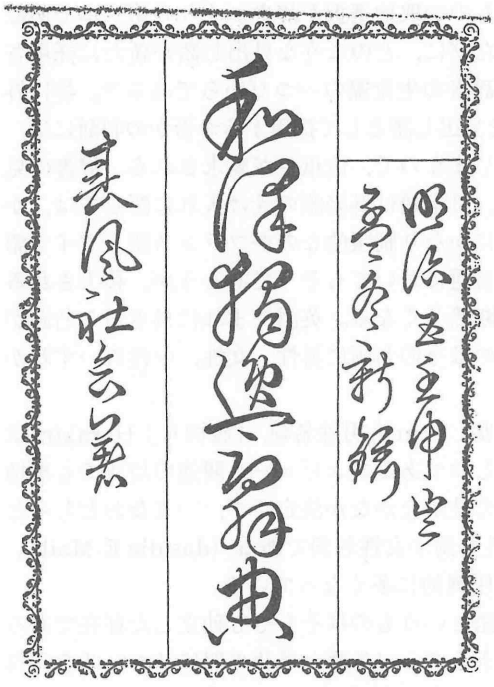
書調所教授，市川斎宮に幕府はドイツ語の勉強を申しつけるが，２日間では如何ともしがたい。いわゆる「大政奉還」後の，1871年（明治４年），ドイツの軍医ミュラーとホフマンが東大医学部の前身，東校に着任する。彼らのドイツ語を通訳できたのは，当時32歳の司馬凌海のみであった。司馬は蘭学，医学，英語に通じ，ドイツ語は在留ドイツ人に習っていた。またラテン語，ロシア語にも明るい語学的天才であった。司馬はその後，東京下谷に「春風社」というドイツ語塾をひらいた。塾生は最盛期で100名を超した。司馬の春風社からはまた1871年（明治４年）独和辞典の草分けとも言える『独逸文典字類』が出る。これは文法書のドイツ語を和訳したものであった。さらに翌1872年（明治５年）には26,000語の『和訳独逸辞典』が，またも春風社から出る。同年には『孛和袖珍辞書』（学半社），『袖珍孛語訳嚢』（長崎），『和訳独逸辞書』（京都）が，さらに1873年（明治６年）には，薩摩の学生たちによる本格的な『独和字典』が出，計６冊となり，仏和の３冊を超えた。当時英和は20冊あった。

1877年，明治10年の10月，『和独対訳字林』2,000頁が出版される[12]。これは斎田訥於，那波大吉，国司平六が３年をかけ分担執筆，ドイツ人リュドルフ・レーマン（律多留富勒曼）が校定に加わった辞典である。ヘボンの『和英語林集成』（再版1872年，明治５年）を下敷きに，そのドイツ語版を作成したのである。この辞書は日本語の配列が，ローマ字でありがならイロハ順という空前絶後のもので，序文には，この方法は，日本学者の多数意見によったとあるらしい。しかし「i, ro, ha...」は日本人にも引きにくく，1895年（明治28年）にアルファベット順の和独が出ると，「イロハ順和独辞典」は忘れられていった。語順はともかくその内容は優れており，ヘボンの和英とならんで明治の日本語を知るための貴重な資料となっている。

和独辞典等の日本語を見出し語とする２か国語辞典において，日本語見出し語をどの順で並べるのがよいか，といのはよく考えてみると難しい話で，英和，独和，仏和のように見出し語がアルファベット順以外に考えられないということにはならない。イロハ，アイウエオ，アルファベットの３通りが考えられるのだ。日本語をアルファベット順に並べるというのも，奇妙なことではある。現在和独辞典にはアルファベット順とアイウエオ順の両方がある。

３．「豆腐」の性は？

やや横道にそれるが，独和辞典の編纂に加わり，また毎年の改訂に現在も加わっている経験から，独和辞典づくりに伴う問題点をいくつか挙げておきたい。現在ではドイツで流通しているドイツ語の１カ国語辞典（独独辞典）が多数入手できるし，日本にも優れた独和辞典が多数ある。われわれは編纂時にそれらの先行辞典を随時参照することができたので，ついつい多くの情報（語義，例句，例文，熟語的用法，文法解説等）を辞典の記述に盛り込もうとした。しかし利用者層や利用目的を考えると，つまり「誰のための辞書か」を考えると，何を書くかではなく，何を書かないかということこそが重要になる。ただ全く癖のない辞典というのも味気ないものであろう。編集者の癖が出た例を大野晋が挙げている。『新潮国語辞典』は鉄道用語がやけにくわしいらしい。編集者の一人に鉄道マニアがいるから，ということだ[13]。



Handwörterbuch
der
DEUTSCHEN SPRACHE FÜR
JAPANER.

ABA

A.
Aak, *f.*
Aal, *m.*
Aalbeere, *f.*
Aale, *f.*
Aalen, *vn.*
Aalkrische, *f.*
Aar, *m.*
Aas, *n.*
Aasen, *va.*
Aasig, *a.*
Aass, *n.*
Aassung, *f.*
Ab, *ad. et. prep.*
Abaasen, *va.*
Abachzen, *vr.*

『和訳独逸辞典』（1872年，明治５年，春風社；1981年復刻版，三修社）

Deutsch und Japanesisch.

A.

Aal, m. ウナギ 鰻
Aalfang, m. ウナギトルコト 捕鰻
Aalförmig, a. ウナギナリノ 鰻狀
Aar, m. ワシ 鷲 〔ニク 腐肉
Aas, n. エジキ 餌食,シガイ 死骸。クサレ
Aasig, a. クサレタル 腐。シウキアル 有臭氣。キタナキ 穢
Ab, ad. ハナレテ 離 〔ウ 右往左往
— und zu, アチラコチラニ。ウワウザワ
auf und —, ウヘシタニ 上下
Hut —, ヅキンヌグ 脫頭巾
Abänderlich, a. ヘンクハスベキ 可變化
Abändern, v. a. gr. ヘンクハスル
Abänderung, f. gr. 仝上スルコト
Abängstigen, v. a. クルシメル。コンクサスル 令困苦。ウレフ 憂
—, v. r.
Abängstigung, f. ウレヒオソレルコト 焦心熱中
Abarbeiten, v. a. シゴトヲシマフ 卒業。フカラス勞。シアゲル。成就スル
—, v. r.

『李和袖珍辞書』（1872年，明治５年，学半社；1981年復刻版，三修社）

各項目の記述量よりも先に，見出し語そのものの取捨選択が辞書づくりの第一歩であることは言うまでもない。広辞苑の新版が出るたびに，どのような見出し語が新たに採用されたかが新聞紙上で話題になるのは，それが辞書の生命線の一つだからである[14]。特に外来語と新語（流行語，若者言葉，俗語など）を見出し語として採用するか否かの判断には，その後少なくとも数年間は活字の形で残ってしまうので，慎重さが要求される。辞書の見出し語として採用されるかどうかはさておき，日本語は外来語の受け入れに関しては，かなりオープンな言語であるといえよう。反対にかなり制限的なのがフランス語。ドイツ語は両者の間に位置しているようだ。いずれの言語においてもそうであろうが，移入される外来語はドイツ語においても英語系外来語が断然多くなる。英語やまれに日本語の名詞が外来語としてドイツ語に入った場合，面白いのはその名詞に男性，女性，中性のいずれかの性が割り当てられることだ。

例えば「きもの」Kimonoは男性名詞，「豆腐」Tofuも男性名詞，「腹切り」Harakiriは中性名詞といった具合。近年まさに日々増殖しつつあるコンピュータ関連の用語でも事情は同じで，電子メールが登場したときにはその性がなかなか決定せず，いまなおどちらとも決まっていない。すなわち，E-Mailは中性名詞か女性名詞である（das/die E-Mail）。ただ現在では女性名詞として使用される例が圧倒的に多くなっている。

根本的な話になるが，辞書に並んでいる単語というものはそもそも独立した存在であろうか。外国語の辞書を見ると，特に分かち書きをする（単語と単語の間にスペースを入れる）ので，そのように見えることがある。いやそもそも辞書は，語を単独で扱い得るという前提にたっていなければ，つくることはできまい。

われわれは中学，高校ころ，英語の予習をする際，知らない単語をまずノートに書き出し，あとでまとめて辞書を引くようなことがままあった。しかるに文の正しい意味がとれず，自分にもわからない頓珍漢な訳文をつくったものだ。辞書に書いてある語義は単語として孤立したときの意味にすぎない。一方実際の文は孤立した単語の意味の総和でないので，頓珍漢な訳にしかならないのである。つまり文脈的意味（コンテクスチュアル・ミーニング）は辞書的意味（レキシカル・ミーニング）を算術的に加えただけでは生まれないことがほとんどなのである。どんなに詳しい辞書があっても，それだけで本が読めるわけではないことは，大方が経験済みであろう。

つまり辞書の記述，辞書的意味のほうが実は特別なのであって，それは文脈的意味から帰納して求められた抽象的意味と考えるべきであろう。外山滋比古も指摘するように，どんな社会や民族でも，まずはじめに辞書を憲法のように定め，それから言語を使用することはない。この点で例外的なのはエスペラントのみであろう。言語活動がなんの支障もなく行われていながら，いまだに辞書をひとつももたない民族はあまた存在するのである[15]。

用例の多い辞書がよいとされ，「単語は文のなかでおぼえろ」というのが外国語学習の鉄則であるのは，理由のあることだ。辞書的意味に加えて文脈的意味から単語の使用状況を観察できるからである。

4．翻訳語の成立

外国語辞典を使って，まとまった文章や文学作品を他の言語に移し替えたものだけが，

翻訳というわけではない。外国語辞典の個々の単語の訳語もまた，一種の翻訳である。柳父章はその『翻訳語成立事情』（岩波新書，1982年）で，われわれが日常生活において当たり前のように使用している「社会」，「個人」，「近代」，「美」，「恋愛」，「存在」などという言葉が，幕末から明治時代にかけて，翻訳のために作られた新造語ないし実質的に新造語に近い言葉であることを指摘した。また「自由」「彼」（「彼女」は新造語），「自然」「権利」などは昔から日本にあった言葉だが，翻訳語として新しい意味を付与された言葉である，とも言う。柳父は，このような翻訳語を多く作ることができた理由を，当時の知識人における漢文の素養に帰している。漢字２字が非常に多いのも特徴的である。柳父はさらに，これらの「翻訳語」は先進文明を背景に持つ上等な「舶来言葉」として機能し，同じ様な意味の日本語より高級な語感があるので，濫用されがちであると言う[16]。濫用が始まると言葉の意味が曖昧で多義的になり，ますます濫用が進むことになる。

現在の日本では「舶来言葉」の使用頻度がきわめて高くなりつつある。しかもそれらを翻訳することもなくそのまま用い，高級感を持たせるために，曖昧で多義的なまま多用しているように思う。極端な例文を作ってみた。

> ぼくたちのプロジェクトのコンセプトは発信するメディアにいかにコンテンツをインプットするかということです。クリエイティブでクオリティーの高いメディアリテラシーがインターネット時代のベンチャービジネスにとって大切です。

105文字中63文字がカタカナである。強く自戒を込めて言うのだが，カタカナ語と「　」のやたらに多い文章は，信用しないほうがよい。

ここでは柳父が取り上げた「翻訳語」のうち，特に「恋愛」に注目してみる。「恋愛」（love）は北村透谷が23歳の時に書いた「厭世詩家と女性」（1892年，明治25年２月「女学雑誌」掲載）という論文で使用したのが最も初期の例である。言葉がないところに概念がなく，したがってそれが存在しないとすると，日本人はようやく110年ほど前に初めて「恋愛」を知ったことになる，と柳父は言う[17]。ではそれまで日本には「恋愛」はなかったのだろうか。柳父の論では，万葉のころから「恋」「愛」「情」「色」はあったが「恋愛」はなかった，ということになる[18]。love の訳語である「恋愛」は「清く，正しく，深く魂から愛する」という意味であり，日本の「恋」は皮相的・世俗的な意味で使われていた，というのだ。この見解に諸手を挙げて賛成することはできないが，柳父が love の背景にマリア崇拝，キリスト教の肉欲否定を見ているのは説得的である[19]。ミンネザング（Minnesang）に典型的な騎士道精神，愛するものを神聖視し，かえって愛するものから遠ざかろうとする傾向は肉欲否定以外のなにものでもあるまい。魂と肉体の二元論という西欧的伝統が「恋愛」の根底にあったことは，日本とは異なる事情である。事実日本でも「恋愛」という言葉を流行させた人々は知識人やその子弟，とくにプロテスタント系クリスチャンに多い。「恋愛」の精神的側面が強調されたわけである。透谷の「厭世詩家と女性」から冒頭の一文を引く。

> 恋愛は人世の秘鑰なり，恋愛ありて後人世あり，恋愛を抽き去りたらむには人生何

の色味かあらむ，然るに尤も多く人世を観じ，尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは，仰も如何なる理ぞ[20]。

秘鑰（ひやく）（「鑰」は鍵の意）とは秘密を解くかぎである。すなわち奥義を明らかにする方法。恋愛こそ「人世」の奥義を明らかにする鍵であり，恋愛なくしてなんの「人生」か。然るに「人世」をよくよく観察し，「人世」の奥義を極めようとする詩人が最も多く恋愛において罪作りなまねをするのはどういう理由なのか，と透谷は詰問する。透谷にかかってはゲーテもバイロンも形無である。

ギヨオテの鬼才を以て，後人をして彼の頭は黄金，彼の心は是れ鉛なりと言はしめしも，其恋愛に対する節操全からざりければなり。バイロンの嵩峻を以ても，彼の貞淑寡言の良妻をして狂人と疑はしめ，去つて以太利に飄泊するに及んでは，妻ある者，女ある者をしてバイロンの出入を厳にせしめしが如き[21]。

木下尚江などは透谷の論文冒頭を読み，「この一句はまさに大砲をぶちこまれた様なものであった」と述懐する[22]。透谷のこの小論は『文学界』の詩人，島崎藤村らにも影響し，明治ロマン主義の一時代を画する論文とはなった。柳父はしかし，このような恋愛感はあまりに観念的で，loveの実態ともあわないものだとしている。つまり「恋愛」は「観念として純化された」ものになってしまった。これも抽象的な翻訳語である「恋愛」の「宿命」である，というのが柳父の結論である[23]。

さて数年前のベストセラーに赤瀬川原平の『新解さんの謎』という本がある。赤瀬川はこの本で『新明解国語辞典』（三省堂）３版以降からいくつかの項目を抜き出し，驚いてみたり感動してみたりする。赤瀬川の他の著作同様，おふざけのようで，その実決して侮れない。いやむしろ端倪すべからざる深い真理を突いている。詳しくは『新解さんの謎』をお読みいただくとして，新明解の有名な「れんあい－する」の訳を見てみたい。

れんあい【恋愛】－する
特定の異性に特別の愛情をいだいて，二人だけで一緒にいたい，出来るなら合体したいという気持ちを持ちながら，それが，常にはかなえられないで，ひどく心を苦しめる・（まれにかなえられて歓喜する）状態[24]。

透谷の時代からは遠くへきたものだが，明治期にももっと洒脱なloveの翻訳があるのをご存知だろうか。漱石の『三四郎』（1909年，明治42年）の中，17世紀の女流作家アフラ・ベーンの『オルノーコ』をサザーンが1696年に戯曲化したときの台詞「Pity's akin to love.」を与次郎が訳す有名な場面。「可哀想だた惚れたってことよ」[25]。

外山滋比古は，明治以降の日本の翻訳文化は名詞的傾向が極めて強いと指摘する。たしかに外国語の訳語として秀逸なものはほとんど名詞に限られているといってよい。幕末，明治の知識人たちは，漢字・漢文の素養を元に苦心の翻訳新語を輩出した。ただ外山は名詞的文化は流動性にかけ，非創造的であるとしている[26]。この詩的な文化類型化の妥当性

は慎重に検討しなくてはなるまいが，比喩としては卓抜である。

5．認識としての翻訳

『翻訳史のプロムナード』を著した辻由美は，翻訳の大部分は「支配的文化」からなされると言う[27]。現在の世界は英語一辺倒の傾向をますます強め，英語，いや正確にはアメリカ語がサイバースペースを含めた世界全体を制覇している事実は否定しがたい。しかし支配的なものに対しては，（憧憬とともに）その抑圧に対する反発があり，それはまた憎悪に変わりやすい。アメリカに対する様々な地域での反発の一因も，あるいはそのあたりにあるのかもしれない。ドナルド・キーンが指摘しているように，かつて日本が，自国の教師を中国から西欧に鞍替えするにともなって，中国への敵対心と蔑視は高まっていった[28]。またフランスの歴史学者レオン・ポリアコフもヨーロッパにおける反ユダヤ主義の擡頭に同じ構図を見ている。すなわち近代ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の背景には，キリスト教支配からの脱却とそれよりも古いアーリア的源流への回帰があり，それまで支配的だったキリスト教の源流であるユダヤ人への敵対心と蔑視が始まった，と言うのである[29]。たしかに近代の反ユダヤ主義，ナチズムに典型的に見られるようなアーリア的源流への回帰と，かつての支配的文化への憎悪の弁証法の説明としては面白い。ただし反ユダヤ主義が近代になってようやく始まったわけではないことを考えると，この説は真理の一部しか突いていないように思える。

このような巨視的な翻訳行為から一転して微視的な翻訳行為を観察してみよう。ロシア語－日本語間の同時通訳者で優れたエッセイストでもある米原万里は，瞬時の翻訳とも言える同時通訳において，頭の中でおこっている現象を次のように表している。

> 「何か液体のような気体のようなものをロシア語という器から日本語という器に，あるいはその逆に移し換えているような感触が，やはりあるのだ。」[30]

また米原は，自分が尊敬するカトー・ロンブに触れ，英・独・仏・露・ハンガリー語の同時通訳，その他の逐次通訳ができるカトー・ロンブも自分と同じような感想を吐露していることを指摘する。カトーの著書『私の外国語学習法』からの引用である。

> 「思想が，（ああ，専門家の方々が，私のこの心理学，大脳生理学，および精神医学の卑俗化を，お許し下さいますように！）**原発言言語の粘着性の抱擁からすりぬけながら，目標言語の語彙的，形態的，統辞（シンタックス）的，音韻的，文体的形式を大わらわで着込んでいくこと**を助けるような技能［…］」[31]

実際に自動翻訳機のための翻訳システムを開発する場合も，いずれの言語にも依存しないような「思想」ないし「概念」そのものの存在を認めているらしい。これをインターリンガ方式というらしいが[32]，「自動」翻訳について解説する能力を筆者は持ち合わせていないのでこれ以上立ち入らない。

最後に翻訳と認識という問題を考察してみたい。外山滋比古は，認識とはエディターシップである述べた。人間は外界をあるがままには認識できない，自分にとって重要な部分，印象に残る部分だけを編集して現実感を構成する，というのである。現実の認識とは編集作業，すなわちエディターシップになぞらえられるというわけだ。

> 「対象の重要な部分に注目し，それを印象に留め，同じようにして印象に刻まれたほかの印象の重要な部分と取り合わせる。こういう操作を無限に繰り返して現実感を構成する。したがって意識される外界は決して現実世界の総体ではなくて，ごく一部の認識によるアンソロジー的世界である。われわれはひとり残らず編集を意識しない編集者なのである。」[33]

しかしその編集作業の前段階として，筆者は翻訳の過程があると考える。認識とは瞬時の翻訳であり，それとほぼ同時に編集作業が行われるのである。

われわれはみな頭のなかに辞書を持っている。「余の辞書に『不可能』はない」と言ったとされるナポレオンは，いわば欠陥辞書を持っており，かくしてロシア遠征に失敗したのである。自分の辞書に言語として掲載されていない現象は，翻訳されることができず，概念として掴めない，つまり，認識の網の目から落ちていかざるを得ない。言語とは差異の体系であり，シニフィアンとシニフィエとの結びつきは恣意的で，発せられた言葉は決して現実のルフランを示し得ない，といった議論はそれ自体圧倒的に正しい。しかし日常生活における現実の認識においては，われわれはそのような地点まで遡って考えることはない。日常的認識には要するに，ひとまずそれが何であるかという同一性の確保（AはBである）が必要となる。これはとりもなおさず頭のなかで辞書をひくことであり，ひとつの翻訳行為と呼ぶべきであろう。しかる後，いやほぼ同時に外山の言うエディター的行為が遂行されるのである。

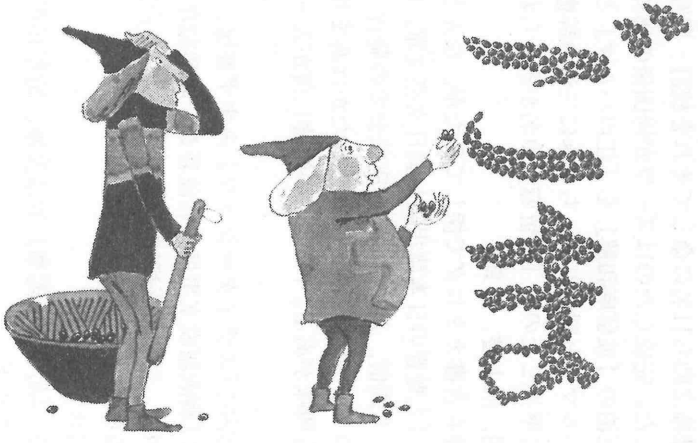
頭の中の辞書にも様々な制限や条件がつきまとう。幼児の頭の辞書を身近な，とは自分の子供の成長過程で観察すると，最初はパパ，ママ，オッパイしかないようである。しかし語彙は，その後爆発的に増えていく。まさに「ターヘル・アナトミア」の翻訳過程と同様，コンテクストと口真似だけで語彙を増やすのである。成人が外国語を習得する場合もある程度幼児の母語習得と似た経過をたどるのであろうが，いかんせん新たな言語の吸収力は幼児に遥かに劣る。母語の干渉や脳細胞の生物学的衰えなどが関係するのであろう。

また例えば日本語を話す成人どうしであっても，コミュニケーションの成立には特殊な辞書が必要なこともある。少し前のNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」では，時々字幕テロップが出ていた。方言辞書が頭の中になければ理解できないからである。

方言に限らず職業的隠語や世代によるジャルゴン，特に若者言葉には辞書が必要な場合がある。日本ではもちろんのこと，ドイツでも若者言葉はきわめて多く，また日本と同様，生成と消滅を短期間に繰り返しているのである[34]。

翻訳と認識に関してひとつの喩えを提供して論を閉じたい。点描画法（ポアンティスムス）という技法がある[35]。右に載せたのは安野光雅の絵本の一部である[36]。黒ごまのひと粒ひと粒が翻訳された概念，その配置がエディターシップといえばわかりやすいであろうか。この両者が揃って初めて，認識する主体にとっての現実感が構成されるのである。

これは、たべる　くろごまです。
ごまは、１つ１つが　ちいさな　てんですから、そのごまを　ならべて　えを
かいたのです。
ミロのビーナスという　ゆうめいな　ちょうこくを　みてかいたものです。
かげのところは、ごまが　たくさん　あつまっています。あかるいところは、
ごまつぶが　すこししかありません。



註

＊）この論文は平成13年度九州大学公開講座「異文化の受容－翻訳を中心として」の一環として，筆者が平成13年12月22日行った講演に基づいて，新たに書き下ろされたものである。

1）吉村昭：『冬の鷹』新潮文庫，昭和51年，９ページ。

2）同上，上田三四二による解説。345頁。

3）杉田玄白：『蘭学事始』岩波文庫，昭和34年，38頁。

4）同上，39頁。

5）吉村昭：同上書，吉村自身による「あとがき」。336頁。

6）同上，30頁以下。

7）同上，64頁。

8）これに関しては惣郷正明：『辞書漫遊』朝日イブニングニュース社，昭和53年に多くを負っている。

9）古書店のリストでは12,000円と18,000円の二つを見つけた。それほど高価な辞書ではない。

10）ズーフ（またはドウーフ，道富；Hendrik Doeff 1777-1835）は1798年に来日，1803年から長崎のオランダ商館長を19年間勤めた。ズーフは1811，12年ごろから私的に長崎通詞数人と，フランスワーズ・ハルマの『蘭仏辞書』第２版（1729年）に準拠して蘭日辞書の編纂を始めた。初稿は長崎奉行に献呈されたが，幕府は通詞，中山時十郎，吉雄権之助ら11名に命じてそれを校訂・謄写させ，1815年秋から16年にかけて１部作成した。完成したのはズーフが帰国後の1833年（天保４年）であった。先に触れた稲村三泊の『波留麻和解』を「江戸ハルマ」と呼ぶのに対し，この『蘭日辞書』は「長崎ハルマ」と呼ばれる。ちなみに三泊の辞書もフランスワーズ・ハルマの『蘭仏辞書』に準拠したので「波留麻」の名が冠せられている。

11）惣郷正明，同上書，72頁。

12）この辞書も古書カタログで探してみたが，なんと20万円の値段がついていた。

13）大野晋：『大野晋の日本語相談』朝日文芸文庫，朝日新聞社，平成７年，375頁。井上ひさし，大岡信，丸谷才一との座談会での発言。

14）逆にどのような見出し語が削除されたかはあまり取り上げられないが，私としてはこちらにも興味がある。「死語」の範疇に何が入ったかを知る手がかりとなるからである。

15）外山滋比古：『エディターシップ』みすず書房，昭和49年，174頁以下。

16）柳父章：『翻訳語成立事情』岩波新書，昭和52年，21頁，64頁など。

17）同上，89頁。ただし昭和52年の柳父の本では「１世紀ほど前」となっている。

18）同上，89頁。

19）同上，93頁。

20）北村透谷：『北村透谷選集』岩波文庫，昭和45年，81頁。

21）同上，81頁以下。

22）柳父章，同上書103頁の引用。

23) 同上，105頁。
24) 金田一京助他：『新明解国語辞典』三省堂第３版，昭和56年，1235頁。
25) 夏目漱石：『三四郎』旺文社文庫，昭和41年，111頁。
26) 外山滋比古，同上書，59頁。
27) 辻由美：『翻訳史のプロムナード』みすず書房，平成７年，10頁。
28) 米原万里：『魔女の１ダース』新潮文庫，平成12年，19頁。
29) 辻由美，同上書，10頁以下を参照。
30) 米原万里，同上書，56頁。
31) カトー・ロンブ（ハンガリー式ではロンブ・カトー）：『私の外国語学習法』ちくま学芸文庫，米原万里訳，平成13年，251頁以下。強調は原文。
32) 米原万里，同上書，57頁。
33) 外山滋比古，同上書，55頁。
34) ドイツの若者言葉に関しては以下の論文がたいへん参考になる。高田博行：「ドイツ語・若者ことばの世界－語場で意味ごっこする若者たち－」。『独逸文学』45号所収，関西大学独逸文学会，平成13年，33頁以下。
35) 外山は各要素的意味の相互のコンテクストを表す「関係意味」の比喩，ないし外山独特の「修辞的残像」の比喩としてやはり点描画法を挙げているが（外山滋比古，同上書，176頁），私は翻訳と認識の比喩として用いたい。
36) 安野光雅：『てんてん』福音館書店，平成13年特製版（初版；昭和49年），８～９頁。

Wörterbücher und Übersetzungen

Keita FUKUMOTO

In seiner Erzählung *Fuyu no Taka* (Ein Falke im Winter) beschreibt der Autor Akira Yoshimura, wie viel Mühe es einem Übersetzer bereite, ein medizinisches Werk wie z. B. eine „Tafel Anatomia" (Lateinisch: „Tabulae Anatomicae") ohne die Zuhilfenahme eines zweisprachigen Wörterbuches aus dem Niederländischen ins Japanische zu übersetzen.

In meinem Aufsatz gebe ich einen Überblick über die Geschichte der zweisprachigen japanischen Worterbücher. Dabei gehe ich davon aus, dass es sich auch bei einzelnen Worterklärungen um Übersetzungen handelt.

Jeder Mensch besitzt in seinem Gedächtnis bereits ein „natürliches Wörterbuch". Erkennt man die Bedeutung eines Wortes, dann benutzt man unbewusst dieses natürliche Wörterbuch, denn alle Erkenntnisse werden in sprachlicher Form vermittelt. Ohne sprachliche, d. h. begriffliche Identifikation gibt es keine Erkenntnis.

In diesem Sinne ist der Übersetzungsprozess unter Zuhilfenahme dieses inneren Wörterbuches für das Erkennen überhaupt unerlässlich. Bei der Auseinandersetzung mit einer fremden Sprache benötigen wir dagegen auch ein „äußeres" Wörterbuch.